

---

# 同じ世界の勇者と見習い

希望

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

同じ世界の勇者と見習い

### 【Nコード】

N9051Y

### 【作者名】

希望

### 【あらすじ】

セーヴル大公国は日々、魔族と呼ばれる獰猛な種族による侵攻危機に脅かされていた。そんな中でついに耐えかねた皇帝が紡いだ言葉は——異世界からの『勇者召喚』。その言葉を聞いたある魔法士の見習いは驚愕する。何故なら彼女は、異世界トリップを現在進行形で経験中の日本人なのだから。主人公の兵藤凜は基本厄介事嫌いの現実主義者。同族に会えたことは嬉しいが、勇者には関わらず元の世界に帰る方法を探そうと思ったところに勇者からありがたくない一言。「一緒に魔族退治をしてくれないか？」いえ、全力で

お断りです。——最強チート勇者と異世界トリップ中の見習い少女の織り成す異世界ファンタジー。

## 第一話：見習いは異世界人（前書き）

2作目の投稿になりました。  
読んでいただけると幸いです。

## 第一話：見習いは異世界人

「――勇者を召喚しようと思う」

端が見えない程の広い空間に響き渡る静かな声。

発するのはセーヴル大公国の頂点に君臨する皇帝。

30代なのに20代と思えるほどの若々しい美貌に威圧感を纏わせる冷酷非情の王。

そんな彼がいる国は近年魔族による侵攻が始まっていた。

魔族とは人間よりも遥かに優れた身体能力を持つ獰猛な種族だ。

そのため、当時は侵攻が始まると共に3日で陥落すると国の誰もが絶望に打ちひしかれていた。

しかし予想に反して皇帝率いる親衛隊が現在まで死闘を繰り広げ、国を守っている。

皇帝自ら先陣を切り、魔族をなぎ倒しているそうだ。

けれど皇帝はそろそろ限界と感じたのだろう。

魔族と唯一渡り合えるとされる『勇者』を頼った。

「……このまま陥落するのも時間の問題だ。ならば賭けてみるのも良いかもしれん」

紡がれた言葉にこの場の全員が息を呑む。

『勇者召喚』は大量の魔力を消費して行う魔法。多量に魔力を持つ生贄を数人犠牲としなければならない。

その上、勇者の意思を無視しての強制召喚だから極悪魔法といっても過言ではない。

「もう時間が無い……。勇者の召喚は満月の満ちる今宵の晩、おこなう！至急準備せよ！」

皇帝が玉座を去ると、周りが慌てて動き始める。  
急すぎる事態に対しても準備を間に合わせようとする彼らの精神は  
立派だと思う。

（さて…私も哀れな勇者の召喚のために準備をしましょうかね…）

私は周りの動きに合わせて準備をし始める。

あ、紹介が遅れてしまいましたね。私の名前は兵藤凜ひょうてい りんと言います。

勘の良い方ならお気づきかもしれません。そう、私はれっきとした  
純日本人です。

そんな私が何故こんなファンタジー溢れる世界に違和感無く存在し  
ているのかと言われますと色々あったですよ。

まあ、詳しい話はまた後日にして簡単に説明しますと異世界トリッ  
プです。

精神科医を紹介してやろうとか思わないで下さい。大丈夫です、頭  
はイッチャってませんから。

いえ、正直馬鹿な話だと思ってましたよ。異世界舐めてました。  
気づいたら環境にとっても優しそうな緑溢れる草原で寝転がっていま  
した。

あれですかね、基本現実主義で日頃から異世界を馬鹿に思ってたか  
らですか？

とにかく私は軽くパニック状態に陥り、命懸けで生活を確保して現  
在は魔法士見習いをやっております。

もちろん元の世界に戻るための方法探しです。

ですから勇者召喚でお仲間降臨はとっても嬉しいのですよ。

勇者という肩書きでの登場は少し哀れに思いますが。

だって勇者なんて聞こえがいいだけの奴隷みたいなものですから。

「リン！お前は何をしているんだ。早く準備を始めろ！」

思わずビクリと心臓が跳ね上がる。

恐る恐る後ろを振り返ればご立腹なご様子の我が師匠、ガウス様。黒い髭をもつさりと生やす50代、威圧感ハンパない。

敵に回したくない人と逆らえない人ナンバーワンを魔法士の中で誇る強者です。

頼み込んで弟子にして貰いました。

「いやいや、今からしようと思ってましたよ」

「ほう。さつきからずっと見ていたが動く気配が無かったぞ」

「師匠、気配を殺すって卑怯だと思いませんか？」

「むしろ爽快だと感じるな。相手の驚く顔が見れる」

「いやあ、ドSもそこまでいくといっそ清々しいですね」

「褒め言葉として受け取られるか皮肉として受け取られるか、選べ」

「遠慮しておきます。今の言葉はお忘れ下さい」

異世界に来て半年、世を渡るための処世術を学びました。

『笑顔は最強の武器』

大抵は笑顔を作っておけば世を渡れます。

私もチャレンジしてますよ。通じない相手に。

「さつさと準備をしろ。神殿の掃除と聖水の調達、終わったら話がある」

はい、死刑宣告を受けた気分です。

話ってあれですか、あの地獄の数日間の再来ですか？

魔法士としての基礎を寝ずに叩き込まれたスパルタの日々が頭をよぎる。

おかげで初級魔法をマスター、でももうやりたくない。

「はい」

笑顔を頑張って貼り付けたまま、神殿へと向かう。

神殿は皇帝の住む城のすぐ隣にある純白に輝く建物。

壁には汚れどころか塵1つ付いていなくて輝きを放っている。

私はわざわざ裏に回って裏口から中へと入る。下っ端の私が正面から入ったら打ち首です。

神殿の中はとっても冷えていて寒い。壁の素材が大理石に近いものらしく、冬の今は神殿自体から寒さが放たれている感じである。

白い息が吐き出され、腕をさする。

（さ、寒い！コートが欲しいよ……。こんな布切れでこの寒さを持ち切れと！？）

視線を下に向け、自らの服装を見る。

ぺらぺらの布地がワンピースのような形に加工されているだけの布切れ。もちろん断熱加工や防寒などは一切してない。

ふと腰まである髪の毛が視界に入る。この国では珍しい黒髪をわざわざ一般的な茶色に染めてある。

瞳も黒は見世物にされるほどだという事を知って、偶然にもポケットに入っていたカラーコンタクトで緑色に変えた。

お姉ちゃんから未使用で貰ったカラーコンタクトを出すのを忘れてて入れっぱなしにしておいて良かった。見世物なんて嫌だし。

私は体を振って寒さを紛らわすと、掃除をし始める。

掃除は簡単。初級魔法の『ウインド風』を使って埃とゴミを集めて捨てるだけ。

指をくるくる回して、掃除を終えると次は聖水を汲みに奥へと向かった。

ちなみに聖水とはぶっちゃけると只の水だと思う。ミネラルウォーターのような水。

ここの人達は崇めてるけど只の水でしょうがとツツコミたくなる。神殿の奥には聖水が溜めてある井戸があり、傍にある水瓶で汲む。中々の重量なので毎回息を切らしてしまう。

汲み終わると、さっきの場所に帰って水瓶を入り口近くに置いておく。後は放置だ。

（よし…終わった…と。師匠のとこ戻って死刑宣告を受けよう。どうせ逃げられないし）

足取りが重くなるのを感じながら、ガウスの部屋に向かう。

ガウスは、国でも高位の魔法士であり神殿を取り仕切る祭司長でもあるため城で部屋を与えられている。

基本はそこにいるので探す手間が無いのだ。

「失礼します」

ノックも無しに入るのはこちらの常識。私も抵抗は感じるものものやっています。

扉を開けて入ると案の定、ガウスが机で書類仕事をしている。

「ああ、来たか。話がある、座れ」

ガウスは顔を上げると、中級魔法の『テレキネシス念力』で片付けてあった椅子を用意する。

私は大人しく座って死刑宣告を待つ。気分は裁判所。

出来れば食事と睡眠をつけて貰いたいと叶わぬ願いを抱いてスパルタ修行を思い出す。

「今日の勇者召喚の事なんだがお前が参列しろ」

ずるりと椅子から転げ落ちる。

何ということだ、身構えて損をした。

「先ず死刑宣告の話では無いことに安堵を覚えたのも束の間、今の人は何と言った？」

「すみません、今何と？」

ワンモアプリーズ。

「だからお前が勇者召喚に立ち会え、高度な魔法を見れば良い修行になると思ってな」

「ちなみに本音は？」

「私は面倒くさいから立ち会わん。代わりにお前を行かせる事で休みを貰った」

「鬼、馬鹿。ドS悪魔」

「何とでも言え。今日は大事な娘と会う日なんだ、」

口元に笑いを浮かべて話すガウスに殺意を覚えるのは何回目だろうか。

よりによって私に勇者召喚に立ち会えだと？

断言しよう、絶対爆笑する。

目の前で勇者様とか言われる同族を見るわけですよ。しかも素で。笑う場面でない場所で爆笑したら絶対最悪でしょ。確実に国を追われる。

ここは仮病を使って休むか？

いや、仮病なんてすぐばれる。特に目の前の人は騙せない、今日は更に娘さんも絡んでるから。

ガウスは20代の娘に溺愛する危ないお父さんなのだ。

最近、結婚して離れて住むことになり凶暴化が進んだ。

ちなみに娘さんはとっても美人で嫁ぎ先が公爵家。貴族の中でトッ

プに位置する。

ガウスは伯爵家なので大出世だった。

「くっ…分かりました。引き受けます」

結局は折れるしかないのだ。仮にもガウスは師匠であり地位もある。そんな人に逆らえるわけが無い。

「そうか、じゃあ私は帰るから後は頼んだ。勇者召喚の参列者マニュアルを机に置いておくから頭に入れておけ。それと服装は神官服が正装だ、そこに新品があるから着替えておけよ。じゃあな」

何だ、この手際の良さは。

とゆうか勇者召喚の参列者マニュアルって何ですか。

異世界にそんなマニュアル存在するんだ。

私は立ち去るガウスを見送った後に、しぶしぶ分厚いマニュアル本を掴みパラリとめくり始める。

『勇者を利用して平和を掴もう、勇者攻略100の方法』

私はパタリと本を閉じて深呼吸をする。

うん、今のは見間違いだ。きつと疲れてるんだ。

だっっておかしい、救世主に対しておもつきし利用という文字。

私はもう一度本の表紙をめくる。

うん、書いてあるのは同じ文字だ。良かった、私の目がおかしくなっただけじゃ無くて。

っていやいや良くない何も良くないよ！

私は現実主義者のはずがいつの間にか現実逃避に走っていたらしいです。

今だけは現実を逃避したい気分です。と言う事で私は何も見ません

でした。

壁に掛けてある新品の服を持ってガウスの部屋から出ると、自分の部屋のある地下へと向かう。

下っ端の部屋は地上ですら無いのがとても悲しいです。

重たい本と汚れを付けてはいけない服が私の心をどんどん重くしていくのが分かる。

夜まではもう少し。月はもう満ち始めているころだろう。

私は地下へと続く階段を下りて奥にある自分の部屋へと辿り着く。

扉を開けて中に入れば、灰色の壁に薄汚れたベッドという質素すぎる4畳の見慣れた空間。

夜までもう時間が無いので、急いで新品の服に着替える。

着方はスパルタで叩き込まれたからマスターしている。着終えた後に残る感想は――ぶかぶか。

サイズが合わなくて裾を引きずる形となっている。この服は元はガウスのために用意されたもので当然といえば当然なのだが。

ふと、『刻量』と呼ばれる時計のような役割を果たすものを見れば夜はもうすぐそこまで迫っていた。

慌てて本を服の中に入れて、勇者召喚の行われる神殿の『光臨の間』へと向かう。

引きずる裾は汚れていく気がするが構ってられない！

遅れたら真っ先に眼に浮かぶのはガウスの怒りと国からの視線だ！息を切らしながら神殿に着いて、中に入る。

まだ始まってはいないらしく、人は居るものの慌しく動いてるだけだった。

そんな中、私に近づいてくる慌しい人影が見えた。

「お、リン。お前も参加すんのか」

「ミリー。神官服ってことはミリーも？」

「もちろん。俺はこうゆうのには人一倍興味があんだよ」

このミリーは喋り方こそ男のようだが、れっきとした女性であり強気系の美人だ。

私と同期で魔法士見習いになったが、すでに彼女は魔法士となって立派に活躍している。

天才的な魔法センスと、美しい美貌によって求婚は日々耐えないという贅沢な悩みを持っている。

「私は師匠に押し付けられたんだって。早く帰りたいのが本音だし」  
「まあまあ、見てて損はねえって！楽しみよ」  
「はいはい」

手を振って去っていくミリーは男に呼ばれていた。

あれは皇帝の長男であるレオン殿下であり、皇帝に負けず劣らずの美貌の持ち主。

二人は恋人同士という噂が流れてはいたが、どうやら真実だったようだ。

私はもうすぐ始まる召喚に備えて、心の準備をしていた。むろん笑わないように。

そして始まりの合図、皇帝のお出ましだ。

「これより伝説の戦士を異世界より呼び寄せる！」

凜と響く声に先程までの喧騒が嘘のように静まり返る。

皇帝の声と共に、端にいた祭司長方が前に出る。

祭司長方が中央に集まり、杖で魔方陣を描き始める。

これでも魔法士の基礎は叩き込まれたから分かる。高度な魔方陣でとても真似が出来そうにない。

私は思わず息を呑み、魔方陣の出来に惚れ惚れとしてしまう。

「——異世界より現れし救世主の御霊よ。今宵、危機に陥ら

んとする我が国を救う新たな救世主の召喚を我は願う。現れる、数多の戦を勝ち抜いてきた異世界の勇者よ!!」

皇帝の叫ぶ声に力が入るその瞬間、魔方陣が強く輝いた。

眼を閉じてしまうほどの強い光に私はたじろぐ。数秒くらい続くと、光はゆっくりと収まった。

その場を静寂が包む。成功？それとも失敗？

眼を開ける前に轟いた歓声がその答えだろう。開ければ、魔方陣の上に青年の姿が見えた。

17歳位だろうか、私よりも年上そうならずりとした顔つきは端整に整っている。白い肌とは対照的な黒い髪と黒い瞳は私の持つていた『色』。

何よりも日本人である事を証明するその色は、私を喜ばせた。

(同族

!!)

相手側にとってはいきなりの事態に混乱してこんな風に思われるのは迷惑かもしれないがとにかく嬉しいぞ！

しかしよくよく見ると青年は物凄い美形顔だった。切れ長な瞳がクールだ。

いかにもな勇者オーラが出ているようである。

「ここは……？」

驚きと戸惑いの混じる声。懐かしい、私もここに来て初めて発した言葉がそれだったよ。

「我が召喚に応じてくれて礼を言おう、勇者よ。ここは、君にとっての異世界だ」

「……は？」

「受け入れられないのも無理は無いだろうが、君には勇者として我が国を救ってもらいたいのだ」

「いや、あのちよつと……」

「ああ、いきなり事が起こり疲れているのだな？ 今、部屋へ案内させる。詳しいことは明日にしよう」

「え、あ……ちよ。はあああ！！？」

皇帝の『勝手に話を進める』攻撃には同情するよ、勇者。  
あれはカウンター攻撃が入られない最強技だよ。

「案内は………ん？」

———  
今、目が合ったのはきつと気のせいだよ。皇帝様が私なんかを視界に入れてくださるなんて勘違いも甚だしいな。  
うん、下を向いておこう。

「おい、その君」

皇帝の声が誰かに向けられて発せられる。  
私はきよろきよると辺りを見回してその誰かを探してみる。

「君だ、裾を引きずってる」

おつかしいな、裾は引きずるものじゃないよ。  
誰だ、身の丈に合わない服なんか着てるのは？

「隣の君達、その子に教えてあげてくれ」

皇帝が溜め息をつくとき、私の隣にいる神官二人が私の袖を掴んで前に引く張る。

ちょちょよい！！

ペイツと皇帝の前に放り投げられた私は冷や汗ものですよ。

「丁度いい、勇者と同じ年頃だろう。勇者を客室に案内してやってくれ」

ええ確かに私は15歳ですよ。ですが同じじゃ無いです。女性の年齢を大雑把に見るのはいけないことですよ。

それでも高年齢ばかりで構成されている神官の中では確かに同じくらいですね。

私を選ぶ理由は十分ありますね。正直、面倒くさいので嫌ですが皇帝にそんな事言えば公開処刑間違いないし。

「…分かりました」

逆らえるなんて奇跡が起きるわけがありません。

私は、皇帝の先にいる勇者同族に視線を向けました。

私も異世界人だとあれば厄介事間違いないし。ばれないように極自然にこちらの世界の住人を装いましょう。

いざ、勝負！！

## 第一話：見習いは異世界人（後書き）

よかったら次回もお立ち寄り下さい。  
感想お待ちします。

## 第二話：勇者は化け物（前書き）

タイトルが少し物騒になってしまいましたが、流血表現などはありません。

## 第二話：勇者は化け物

「えつと……。初めましてー、勇者様？」

皇帝から案内という形で神殿から出た私と勇者の間に流るるのはひたすらに長い沈黙。

とりあえず勇気を振り絞って話しかけてみましたよ。挨拶は日本人として当然です。

けれど同じ日本人であるはずの勇者からは反応が一切返ってきません。どつかでしくったつけ？

勇者は険しいお顔をして下を向くのみ。あーさすがに状況整理の時間はあげた方がいいよね。

「……ここはどこなんだ？俺は学校の帰り道にいた筈なんだが…」

なるほど、だから服装が制服なんですね。青いブレザーとはかつこいい。

それにしても青いブレザーって私の知ってる超有名な進学校のものに似てるなあ。

偏差値80を超えてるとか一般人に喧嘩を売ってるとしか思えないよ。

「ここは勇者様から見て異世界ですよ。近年我がセーヴル大公国は魔族の脅威に晒されており、非常に不味い状態なのです。ですから最後の頼みの綱として貴方が召喚されました」

よし、噛まずに言えた！

服の中に入れておいた本の1ページ目を見ながら言い切る。

勇者は私の後ろについて来ているといった感じなので本を見ている

ことは多分ばれていないと思う。

「それって……俺にこの世界を救えってことか？」

「平たく言えばそうゆうことです。意思を無視されて強制的に召喚された上にこちら側の問題を押し付けてしまっって申し訳ないと思っています」

「本当に…その通りだな。俺は元の世界には帰れないのか？」

私は進める足をピタリと止める。

結論から言うならまず帰れない。帰れるなら私は今ここにはいないけれど勇者マニユアルでは、帰れますと明記してある。こうやって書いてある意図なんていくらなんでも分かってしまう。

勇者の協力を失わないためだ。帰れないと言えば勇者は怒り、協力ではなくってしまっだろう。

しかしまだ帰れると分かるならば帰す事を条件に魔族討伐の協力を仰ぐことが出来るからだ。

さて、どちらを選ぶうか。個人的には帰れませんよと真実を告げてあげたい。

けど告げたら告げたで後々厄介だ。ここは日本人特有の曖昧作戦を貫こう。

「…私は一介の下っ端ですからそのような事は存じ上げません」

後ろを振り返り、半年間培ってきた笑顔を勇者に向ける。

勇者は、目を見開いた後に眉を寄せて怪訝そうな顔を見せた。美形だから一枚の絵画に書かれた一種の表情のように思える。

「そうか…。じゃあいい」

「そうですか。ではお部屋に着きましたのでお入り下さい」

私が足を止めた横にある部屋は国賓VIP専用の部屋。

未だに一回も中に入ったことが無い部屋に入るのは勇気が入る。

私は、震える手で扉を開き勇者を中へと促す。

勇者は躊躇いも無く中へ入った。

「今晩はこちらでお休みを。何か御用がございましたらそこら辺でうろつろしている女官に声をおかけ下さい。ただし部屋を出ないで下さいね」

「分かった。……なあ、まだ質問があるんだがいいか？」

「答えられる範囲でならよろしいですよ」

「もしもの話だが逃亡を図ればどうなる？」

私は一瞬固まってしまった。まさか勇者から見て異世界人である私に堂々とそんな事を聞くとはい思わなかった。

鎌をかけてるのが、それとも只の馬鹿なのか。

どちらにせよ、様々な驚嘆事実にも動じなかった私を驚かせたんだ。褒めてあげましょう。

「…そうなつてしまえばこの国が終わるだけです。最も、この国の人はそんな気がさらさら無いようですが」

「どうゆう意味だ？」

「気づいていませんでしたか。勇者様の体には、束縛魔法が施されています」

「束縛……！？奴隷かよ……」

「まあ、救世主に対してのおもてなしとは言えませんがこちらに召喚された際に自動的にかかる仕組みだったようですに手遅れですね。もう解けない位まで魔法が進行しています」

「それじゃ……」

「はい、勇者様はこの国を救うしかここで生きていく方法が無いという事です」

終始笑顔のまま会話を続けた。

勇者は流石に堪えたようで顔に翳りを見せた。

束縛魔法というのは本当だった。勇者を召喚するために作られた魔法陣の中には束縛魔法と追跡魔法の混合魔法の術式が組み込まれていた。

私もこれには同情する。

これじゃ本当の奴隷となっている。

「それではこれで失礼します。明日からこの国を救うために頑張ってください」

私は扉を閉めようとドアノブに手を掛けると、勇者の手がすっと伸びてきて私のドアノブに掛ける腕を掴んだ。

勇者の方を見ると何か言いたげな顔をしていた。

「何ですか？」

「…まるで他人事なんだな」

「……はい？」

「だから、この国の事。君はこの国の人だろ、なのにもうこの国がどうなってもいいって言ってるような口ぶりだ」

「いやあ、他人事ですから。」

しくったな、墓穴掘った。もうちょいこの国を思わなきゃいけないかったようです。

「…そんな事ありませんよ。私だって、魔族の侵攻に平静を装うことが精一杯なんですから…」

肩を小さく震わせて、下を俯く。

勇者は慌てて謝ってきた。

悪いね、これもここで生きてくために学んだ事なんだよ。

私はさりげなく勇者の腕を外して、俯きながら扉を閉めて廊下に出た。

（中々勘の鋭い勇者だったな。けど詰めが甘い。あれだけの演技でころつと騙されるなんて）

服の中に入れておいた勇者マニュアルを取り出す。

勇者マニュアルを初級魔法『火<sup>ファイア</sup>』で燃やすと、廊下の窓から捨てた勇者とはもう関わらないようにしよう。

隠し通せる自信はあるけど何よりも厄介事を運びそうなタイプだね、あれは。

私は私で元の世界に帰る方法を探しますか。勇者召喚の魔方陣を調べれば何か分かるかな？

廊下を歩く足をふと止めると、窓から星を見上げる。

日本とは違って、輝かんばかりの星が無数に見える。

初めの頃はただ綺麗だと感じていたが、いつの間にかここが私のいるべき所ではないという事を示しているような戒めに感じてしまっていた。

私は星を睨みつけてから再び歩き出して、自分の部屋へと向かった。部屋に入ると着ているぶかぶかの神官服を脱ぎ捨てて、ベッドの下にある新しい服を取り出す。

冬用に作っておいた自作のワンピースであり、中に綿を詰めておいたので暖かい。

けどこれはあくまで部屋着なので外ではあの薄いワンピースを着なくてはならない。

私は自作ワンピースを着ると、特にすることも無いのでベッドに入った。

シーツのような薄さを誇る上布団は寒さを素通しして、夜は眠りに

くい。

数時間くらいじっとしているが中々眠気は襲ってこず、仕方ないのでベッドから上体を起こした。

(…暇だし、せつかなら魔方阵を覗きに行こう)

私はこっそりと部屋を抜け出して、部屋着のまま神殿へと向かった。夜なので部屋に常備してあるランタンを持っている。

神殿に着くと、裏口を開けて中へと入る。

神殿の中は静まり返っていて、少々不気味に感じる。

(えーと、魔方阵発見！)

ランタンの光で僅かに見えた魔法陣の側に駆け寄る。

しゃがみこんでランタンの光を魔法陣全体に当てて見てみる。

魔方阵は何度見ても飽きないような惚れ惚れとした出来で、見入ってしまう。

しかし、そこである事に気づく。

(これ……束縛と追跡の他に人体強化と魔法能力付加も組み込まれてる…。どっちも禁術…、それを大勢の中でやるなんて大胆にも程がある。けどこんなに小さいんじゃ誰も気づかないね。カモフラージュのために祝福の術式を大きくしてるのか)

人の体は普段脳の活動を16%ほどに抑えているが、それを無理に外して脳の活動を60%にまで上げる人体強化に魔法を行使できるように膨大な情報量を脳に送り込む魔法能力付加。

どちらも人体を破壊しうる危険な魔法。

しかもそれに気づかれないように祝福で痛みや違和感を消している。用意周到。恐ろしいね、この国は。

勇者本人を化け物に仕立て上げた。

（おいおい…嘘でしょうに。よりによってこれも組み込んだのか…  
『<sup>ドラゴレイク</sup>竜化』。人を何だと思ってるの…）

竜は古代から世界の支配者と呼ばれる種族。固き鱗は刃を通さず、大空を自由に駆け巡る翼と火を吐く息吹は正に王たる風格を漂わせる。

そんな竜に憧れ、人が開発したのは人を竜にすることが出来る竜の血を使った『竜化』。

けれど、人ごときが竜の力に耐えられる訳も無く大抵は力に負けて死ぬ。

勇者は知らず知らず体のリミッターを外されてるから耐えているのかも知れないが長くは持たない。

確実に勇者は死んでしまっただろう。

私は流石に危険だと感じ、勇者にせめてこの事だけでも伝えてやろうと立ち上がった。

その時、カッンと誰もいない筈の神殿から足音が鳴り響く。私ではない。

「そこで何をしているんだ？リン＝ヒヨード」

フルネームを唐突に呼ばれ、体が固く強張る。

聞き慣れた声だった。いやいや、まさかあの人がここにいる訳ない。今は深夜だよ？

「…あゝ、どうして貴方様がこちらへ…」

振り返って嘆息をつく。

見慣れてしまったその顔は出来れば今は見たくありませんでした。

――師匠、ガウス。

「帰って来たらどっかの馬鹿が神殿に入っていくのを見たからな」

「ほんつと気配消すの好きですね」

「ふん、で？何してる」

「…勉強？」

「勉強か、感心だな。場所がここでなければ」

「あ……はは……」

「ははは。……ついて来い」

「…いえっさー」

引きずられて神殿を出ると、ガウスの部屋まで一直線。

ああ、今度こそ死刑宣告の予感。今度からしないんで今回だけは勘弁して下さい。

「ったくお前は問題を起こすのが得意というか……。常識が無いのか？」

「失礼な！ありますよっ。まず…不正をやるなら出来ないように…とか！」

「どこが常識だ！非常識を堂々と胸を張って言うな！」

「どこが非常識ですか！我が家の家訓になんて言い草…！」

「家族自体常識が無いのか！？」

「にしても弟ってばいっつも家訓と正反対の事をするんですよ。どう思いますか？」

「弟は唯一の常識人か。お前は弟を見習え」

「家訓破りまくったら庭の木に吊るされるんですよ。弟はしょっちゅうです」

「なんて家だ」

珍しくガウスの取り乱す姿を見てしまった。ここに携帯電話があれば

ば今すぐ写メりたい。

そして全国に配送してやりたい。

「まあいい、いや良くないが。実はな娘に嫌いと言われた」

「限りなくどうでもいいです」

「聞け。衝撃が走った、愛してやまないそして可愛すぎて目に入れても痛くない程の娘に嫌いだと言われた。これ以上の悲しみがあると思うか？」

「そこら辺にごろごろありますよ」

「いや、無いだろう。それを聞いた瞬間、私は4階の窓から落ちて頭から打った」

「何で傷が無いんでしょうか？」

「それはホラあれだ……。とにかく私は今とてつもなく死にたい」

「じゃあ死ねばいいんじゃないですか。ナイフ持ってますよ」

「けどここで死ねばもう二度と娘には会えないんだ……うおおおおお  
おおお……」

「良い大人が泣かないで下さいよ」

「これが泣かずにいられるかあああああ……」

「じゃあ泣いていて下さい。私が死刑宣告かと思って身構えていた  
ら娘話を延々と……。失礼しましたー」

私はガウスの部屋の扉を開けて深々とお辞儀をする。

その時、ガウスから真剣味を帯びた声がかかる。

「……魔方陣。勇者には伝えてやるなよ、余りにも酷だ」

私は机に突っ伏しているガウスから漏れた声に一言返事で返した。

それから自分の部屋に戻り、今度こそと思ってベッドに入った。

寒さを噛み締めながら私は眠りについた

———と思ったらいきなり活動開始の鐘の音が鳴り響

いた。

まさかと思い、ベッドから跳ね起きると部屋の刻量を見る。  
刻量の指す時間を日本時間にとすると、朝の6時。活動時間だった。

（一睡もしてない

――！！）

冬のためにまだ6時は陽が昇っていない時間帯なので油断していた。  
私は悲しみを抱きながら服を着替えて再びガウスの部屋へ行った。  
中に入るとガウスが嫌な笑いを浮かべながら待っていた。

（分かってて言わなかったのか……！この悪魔めえ……）

目の前のドSを睨みつけると逆に睨み返された。こっわ！！

「よく眠れたのか？」

「それ、分かってて言ってますよね。人の悲しみを何だと思ってるんですか」

「快感？」

「うわーお。見事なるドS発言。さっきの泣きは嘘ですか」

「馬鹿いうな。娘に嫌いと言われたんだぞ」

「さいですか。で、今日は何を？」

「今日は今から全員玉座の間に集合。勇者の事で」

「……はあ。分かりました」

私とガウスは朝食も無しの状態で玉座の間と呼ばれる皇帝のいる場所に向かった。

ガウスの部屋から玉座の間までは歩いてすぐといった距離。

これはガウスが皇帝から信頼されていることを示している。

私達はもちろん玉座の間にも裏口から入ると、玉座へと続く赤い絨

毯の両端に整列して並ぶ。  
待つのは皇帝と勇者の登場。

「皇帝陛下。並びに勇者様のご入場です」

どこからともなく放たれた言葉で玉座の間の扉がゆっくりと開く。  
すると皇帝陛下とその隣に並ぶ昨日の勇者の登場。

皇帝陛下と勇者は美形だからヤバイほど絵になってしまふ。すでに  
この場の女性は全員見惚れている。

私以外。私は目の保養だなんていう感じかな。

皇帝は玉座に着き、勇者は絨毯の中央に佇む形となった。

「さて、勇者よ。名を聞かせてもらえるか？」

皇帝の威圧感満載の声にも顔色1つ変えずに勇者は答えた。

たちはな りゅうてい  
「橘劉斗」

「リユートが名前だな。本題だが、リユート。率直に問おう、この  
国を救ってくれないか？」

「…俺にとつての利益はあるのか？」

「もちろん褒美はやるし、元の世界に帰す事も誓おう。後はこの世  
界の財宝を持つてかえってもらって構わん」

「ふーん…分かった。引き受けてやる」

おいおいそれだけの条件で引き受けるなんて随分と軽いね。

「ただし、仲間をくれ。一人じゃきつそうだ」

「仲間なら初めからつける予定だったから決めてはいる。どれも精  
鋭だ」

「へえ？」

「まずは騎士団副団長のアーリアに、神官長のクレア。それから魔法士のミリーと我が娘の皇女ラルアだ」

おお、物凄い精鋭の集まりだがハーレム化しそうだな。いや確実になるな。

勇者よ、頑張つて醜い女の争いの餌となれ。

勇者の前に呼ばれた4人が前に出る。誰もが目も眩むような美人。しかしその中にミリーも混ざっていたのは少々驚いた。彼女は殿下と恋人だと思つてたし。

「この4人は我が国の誇る精鋭だ。不満はあるか？」

勇者は顎に手を当てて、黙りだす。

そして意を決したように言った。

「一人、仲間に入りたい者がいるんだがそいつは駄目か？」

緊迫感が広がった。勇者自ら引き入りたい人物、誰だろ？

「…誰だ？」

その場に静寂が訪れ、皇帝が固唾を呑む。

皇帝の言葉を受けた勇者は口元に笑いを含ませながら言った。

「昨日、俺を部屋まで案内した魔法士見習いのリン＝ヒョードだ」

## 第二話：勇者は化け物（後書き）

良ければ感想をお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9051y/>

---

同じ世界の勇者と見習い

2011年11月27日12時47分発行